「底が突き抜けた」時代の歩き方 368

「死にたい思いを抱えながら死ねずにいる」

空気が蔓延している中でのネット集団心中

ネット掲示板に出された「心中参加者募集」に応じて一緒に死亡した最初のネット心中ともみなされる、03年2月11日に発見された死亡者のうち、少なくとも二人は失業状態にあった。ネット心中の呼びかけ人である26歳の男性は《昨年、出版販売会社を退職後、再就職できずに悩んでいたという》と『週刊朝日』(03・2・28)には記されており、同誌には更に、死亡した24歳の女性二人のうちのどちらかのものともみなされる、今年(註-02年)4月に首になり、それいらい、80社位就職活動をしてきました。成果はなく無職の状態です。おかげで、日に日に精神的苦痛が強くなってきました(中略)問題は、誰もいない廃墟や車を探していることです(中略)心中相手募集をしている方がいるのなら誘ってもらえないでしょうか という書き込みが掲載されている。川崎市の女性は自宅近くのコンビニでアルバイトをしていたことや、船橋市の女性は《昨年、都内の保険会社を退職した》と記されていることからすれば、三人とも定職に就いていなかったことが推測される。

いうまでもなく失業状態にあったことが心中参加の大きな要因であったと速断するわけにはいかないとしても、失業状態がネット心中に小さからぬ影を投げかけていることは否めない。この「失業状態」を、生きようとする気持を萎えさせる目の前の大きな障害と解するなら、二番目のネット心中事件とみられる三重県津市の場合は、その大きな障害は交通事故や借金のかたちをとって当事者に大きく覆い被さっている。24歳の男性は『週刊新潮』(03・3・20)によれば、「気の弱い感じの彼が自殺したのは、1月30日に車で人身事故を起したのが原因です。大雪の道で車がスリップ、相手に意識不明の重症を負わせてしまった」。また20歳の女性は《高校を卒業後、コンピューター関係の専門学校に通ったが、昨年12月に車を運転中に横転。事故によるショックで鬱病となり、学校も退学して病院通いをしている最中だった。》北九州市から津市に駆けつけた三年越しの恋人もいた23歳の女性は、「車のローンやパソコン機器の購入代などの借金が全部で300万円あり、自殺の原因も、この借金を苦しめたものと思われる」ということだった。

失業状態であれ、交通事故であれ、借金であれ、自殺しなければならぬほどの大きな要因ではないといえなくはない。確かにそれらの事情が自殺の引き金になったかもしれないとみるなら、安易に自殺に走るようになったと嘆いてみせることもできる。しかしながら、問題はそんな嘆きの中には存在しない。その程度の障害ですら自殺するに足る

大きな要因となってしまうほどに、生きることが困難な、先の見えなくなった時代の中で、自分だけに特別に申し掛かってくる失業や交通事故や、借金として細々とした自分の前途を大きく遮るようにどうしても感じられているということが問題なのだ。今の時代が若者だけでなく、誰にとってもどれほど生きづらい時代であるかをみなければ、ネット心中が安易な自殺としかみえないのは仕方がない。

短編集『どこにでもある場所とどこにもいないわたし』（文藝春秋）を最近刊行した作家の村上龍は毎日新聞（03・5・7）のインタビューに、《日本人が経済成長とか、子供に快適な暮らしをさせてやるとか、国民が一丸となって抱ける目標がなくなった》という近代化が達成された後の、《体験したことの無い時代に突入》するなかで、「今の日本人は単に空虚で寂しいというだけではないんですね。もっと切実な問題として、どう生きていけばいいのかわからない。都市銀行や大手スーパーに入っても、不安が残る。安定したモデルが見つからない。若い人も薄々気がついているんですよ。だから、フリーターが増える」と答えている。《希望とは、将来の方が今よりよくなるということ、と定義する。経済的なことでも、心の充実感でもいい。もっと俗っぽく、今より女の子にもてるようになること、といってもいいという。》

「ぬるま湯のような場所というのは、人間が個人として突出したり、誰かと対立したり、しない場所なんです。そういう場所はあってもいい。でもそこに満足してしまうと、他人と共有できない自分だけの希望とか、生き延びていくためのスキル（技術）や情報とかが手に入らない。そういう場所を舞台にして書いてみました」と彼がいうのは、もはや「ぬるま湯のような場所」で生きられなくなっているにもかかわらず、その外で生き抜くだけのたくましさや身を着けていない「寂しさ」にほかならない。つまり、「ぬるま湯のような場所」で生きられなくなっていることの「寂しさ」と、だからといってその外に飛び出して生き抜くだけのたくましさも身に着けていない「寂しさ」の、二重の「寂しさ」に今の日本人は見舞われているということだ。

「他人と共有できない自分だけの希望」が必要であるとしても、その希望は遠くを望むような大それたものでなくともよい。自分の足許に転が^{さま}っていて、手を伸ばしさえすればいつでも手の届くような、希望とはいえないほどの細やかな希望であってよい。《将来の方が今よりよくなるという》見通しや徴候が得られればよい。いや、感じられさえすればよい。《経済的なことでも、心の充実感でもいい。もっと俗っぽく、今より女の子にもてるようになること》だっていい。だが、その程度の希望ですら、人間が生きていくために不可欠といつてもよいそのような希望ですら、出会うのが、あるいは手に入れるのが奇跡に感じてしまうのが我々の時代である。将来の方が今より悪くなると大半の日本人に思い込まれている時代の真っ只中で、そんな空気を吸い込んで細やかな希望を紡ぎだすことがどれほど難事業か。

同じ作家の山田詠美も、《アメリカ南部の町・ロックフォートを舞台に、ハーモニーとロビンという17歳の双子の兄妹が、9・11の同時多発テロに巻き込まれた母親の

死を乗り越え、恋人や父や友人たちとの交流を通して成長していくさまを描いた青春小説》(『文藝春秋』03・5)と謳った新作『PAY DAY!!!』(新潮社)で、共有する問題を扱っているようにみえる。《小説の核心にあるテーマ。それは、大切な人を失った人間が、自分を再生させていくにはどうしたらいいのか、という問いである。テロのような社会的事件であろうと、交通事故や病気による死であろうと、共にかけがえのない時を送った人間が失われてしまう悲しみや心の傷に違いはないだろう。詠美さんが焦点を当てていくのは、この普遍的な感情のほうなのだ。

「何か理不尽な理由で、大切な人を亡くした経験は、特に10代にとっては重大な経験でしょう。それをトラウマにするか、もっとポジティブに“大切な人も明日には会えなくなるかもしれない、”という緊張感をもって他人と向き合えるようになるかは、本当に瀬戸際だと思う。私は、人の死について考えることは、とても品のあることだと思っています。そういう人たちは、人が永遠に存在しているという前提のもとに生きている人とは全然違った生き方をしている。ただ、そうやって切羽詰まった想いを抱えながらも、私の人生は私の人生と思えるかどうか、また重要な分岐点なのですが」(『ダ・ヴィンチ』03・5)

《大切な人を失った人間が、自分を再生させていくにはどうしたらいいのか、という問い》を、失職であれ、交通事故であれ、どん底状態にある人間が、自分を立ち直らせていくにはどうしたらいいのか、という問いに変換させれば、ネット心中に集まる若者たちにも重なってくる。彼女へのインタビュー記事は次のように締め括られる。《青春小説『PAY DAY!!!』は、アルコール依存症の伯父がスニーカーにゲロをかけたと嘆く、ハーモニーの絶望で始まり、伯父の初めての給料日を喜ぶ家族の風景で幕を閉じる。かつて南部の肉体労働者たちは、過酷な労働の日々にあっても、給料日には、「神様ありがとう」と陽気に歌うことができた。人は些細なことで絶望することもできれば、些細なことで幸福を味わうこともできる。そこに想像力と、一抹のユーモアさえあれば。》

題名の「PAY DAY」(給料日)は些細な幸福をあらわしているが、最初のネット心中の参加者たちは失業状態によって些細な幸福である給料日すら剥奪されていたのだ。給料日を剥奪された失業状態が些細な絶望であったとはとても思われぬが、《伯父の初めての給料日を喜ぶ家族の風景で幕を閉じる》小説とは異なって、これまで手にしていた給料日が失業によって剥奪され、自分にはもう二度と給料日が訪れることはないと思ったとき、ネット心中への誘いが目の前に大きく迫ってくるのであろう。もちろん、もう一度給料日に出会おうと失業状態から一歩踏み出そうとすることも考えられるが、人はどん底状態でいつも岐路に立たされているといえる。「大切な人を亡くした経験」を「トラウマにするか、もっとポジティブに“大切な人も明日には会えなくなるかもしれない、”という緊張感をもって他人と向き合えるようになるかは、本当に瀬戸際だ」とすれば、その岐路の瀬戸際において人がネガティブにならずに、ポジティブになるには、一体何が必要とされるのだろうか。

山田詠美は、《そこに想像力と、一抹のユーモアさえあれば。》切り抜かれるといっているのだ。つまり、どん底であっても《想像力と、一抹のユーモアさえあれば》、人はやがて些細な幸福に出会えるし、逆に想像力もユーモアもなければ、人はどん底に押し潰されていくだろう。こう考えることができる。自分にとって不利な状態をどん底とするかどうかは、自分が決定することであって、他人の目にどん底に映ろうとも、自分がどん底とっていない間はどん底ではないし、逆に他人の目にどん底と映っていなくとも、自分がどん底とってしまうなら、その状態はどん底であるという以外にない。それは自分という主観的な見方の問題ではない。そうではなく、どんなに不利な状態であろうとも、その不利な状態に押し伏せられないように生きようとするかどうかの問題なのである。想像力とユーモアさえあれば、不利な状態の中でも人は自分をどん底にしないで生きていけるのだ。

人は自分を取り巻く状態に抗う存在でもあれば、その状態をそのままに受け入れてしまう存在でもある。どんなに悲惨な状態が襲いかかろうとも、想像力とユーモアをもって人はその悲惨さに抗うことができるし、逆にその悲惨さに自分が埋め尽くされることもある。そうすると、本当の悲惨とは自分を取り巻く状態の悲惨ではなく、その状態の悲惨に自分が取り込まれてしまった時であることがわかる。悲惨な状態に取り込まれるのは、自分に抗うなにもものも、つまり、想像力もユーモアも欠損しているからだ。欠損しているのは、想像力もユーモアも必要としない生き方を自ら選択してきたということにほかならない。したがって、「ぬるま湯のような場所」から飛び出して、全く異なる場所で生き抜くたくましさとは想像力とユーモアを備えているかどうかであることに気づく。どんなどん底であっても、想像力とユーモアさえあれば、さまざまな種類の給料日ペイデイが些細なかたちで喚び込まれることは間違いない。

しかしながら、想像力にしてもユーモアにしても、独りで天から降って湧いてくるものではない。想像力もユーモアも生み出されるものであり、育てられていくものである。想像力やユーモアが生み出される土壌や、育てられていく環境が貧困であれば、個々人の努力で想像力やユーモアを入手しようとしても、入手できるものではない。なぜなら、想像力やユーモアが生み出される余地のないところで人が育てられれば、その人に想像力やユーモアが宿す機会はずに訪れないからだ。ネット心中に若者たちが集う時代つどが映しだしているのはしたがって、些細な幸福ペイデイを表象している給料日ペイデイすらが剥奪されていく生存条件の悪化であるよりも、給料日ペイデイが喚び込まれていく想像力とユーモアの枯渇こかつであることは明白である。だがそうであるとしても、給料日ペイデイを剥奪していく失業状態が想像力とユーモアを生み出す土壌をますます貧困にしていることもまた、疑問の余地がない。

文芸評論家の斎藤美奈子は『婦人公論』(03・2・22)のコラムで、若者が「簡単には就けなそうな職業に就く」という「夢を持つ」ことを追い立てられている感じにあることに触れて、こういう。テレビドラマなんかでも、《夢が奇妙に幅をきかせてい

るのは、いまが「夢でも持たなきゃやってらんない時代」だからかもしれない。80年代中ごろから90年代初頭にかけてのパブルのころは「夢」なんて口にするのは気恥ずかしく、「今が楽しきやいーじゃない」の享樂的な気分がむしろ大勢を占めていた気がする。それが近ごろはどうだろう。「夢を持って」「願えば夢は必ずかなう」とかかっているけど、本当は夢なんか語っている場合ではない。現実的な、明日のメシのための仕事さえ危ない、そんなご時世なのである。

たとえば失業率である。2002年11月の完全失業率は5.3パーセント。2001年7月にはじめて5パーセントを超して以来、ずっとこのへんをさまよい続けている。失業というと、なんとなく中高年のイメージがあるけれど、年齢別にみると、45～54歳の男性の失業率は全体値よりも低い4.1パーセント。逆にもっとも高いのは15～24歳の男性で、なんと10.7パーセント。若者の失業のほうが中高年の失業より、じつははるかに深刻だったのだ。

数字の上からもうひとつ、看過できないのは高校生の就職難だ。これも2002年11月末時点で、今春の高校卒業予定者の就職内定者は過去最低の60.3パーセント。就職希望者の半数近くが仕事を見つけれないままにいる。さらにいえば、離職する若者が絶えないことで、定職率も下がっている。》

ここから「若者の労働意欲の低下」だの、フリーター志向に対する「ぜいたく」「わがまま」なイメージが湧き起こってくるが、《実態はそんなものではなく、マジメに就職しようにも職がない。あっても希望の職種ではない。希望の職種でなければ仕事を辞める率も上がるし、そもそも就職先がなければマジメに学校に通う気だってしなくなる。彼らだって好きでフリーターなわけじゃないのだ。(中略)

若い人たちが「夢」とかいいだしたのは、現実社会に希望がないことの裏返しみたいにも思える。宇宙飛行士は極端にしても、ミュージシャンとかタレントとか作家とか、実現の可能性が薄そうな夢を追うことが現実逃避になってるとか。夢を追うのは悪いことではないし、早くから就きたい職業のイメージが明快な人は幸せだと思う。でも、夢万能主義は危なっかしい。だって夢に挫折したら、どーするんですか。いつでも路線変更してやらあ、くらいの気持ちじゃないと、すぐにポキッと折れちゃうぞ。

(中略)10代で「あなたはウチの会社にはいりません」といわれるのは、大学に落ちるのより辛いかもしれない。ポスト終身雇用の時代に、大人が若い人たちに教えることがあるとすれば、「夢を持って」でも「就職しろ」でもなく「夢は修正可能だ」ってことじゃないかと思う。大きな夢より小さな軌道修正。夢なんか持ってる人、現実には少ないわけじゃないですか。いま必要なのは、目の前の雇用対策だ。》

最初のネット心中の参加者に失業者が多かったことを考えると、《いま必要なのは、目の前の雇用対策だ。》に疑問の余地はない。村上龍の文脈でいえば、「職がない」ことは《将来の方が今よりよくなるということ》と逆方向にあるし、山田詠美の文脈で言っても、些細な幸福である「給料日」から遠去けられることであるからだ。斎藤美奈子は

このコラムでは触れてはいないが、「職がない」ということは《大人になることが困難な社会》でもあることを浮き彫りにしている。哲学者の鷲田清一は『中央公論』(02・7)の時評で、こう指摘する。《成熟ということ、大人になるということが、まずは衣食住といった生存の基本条件からさまざまな社会活動までじぶんの生活をじぶんでマネージできるということ、つまりは「自活」できるということであるとしたら、その「自活」への道が若年層にとってはますます塞がれつつありなのが、現在の状況である。もちろんここで「自活」というのは、他者に依存しないということではない。食べ物や衣類ひとつ手に入れるのも、他のひとたちの力、システムの力を借りないとできないのがわたしたちの社会生活であるかぎり、「自活」というのは他のひとたちに依存しないで、ということとはちがう。むしろそうした相互の依存生活を安定したかたちで維持することをも含めてじぶん(たち)の生活をマネージできるということが、これまでひとつとしての成熟のしるしとされてきた。そういう意味では、「自活」の道が塞がれるというのは、成熟の可能性が塞がれるということでもある。》

《成熟の可能性が塞がれるということ》は、いうまでもなく幼稚なままに置かれるということである。村上龍が語っていた、「人間が個人として突出したり、誰かと対立したり、しない」「ぬるま湯のような場所」に安住して、「他人と共有できない自分だけの希望とか、生き延びていくためのスキル(技術)や情報」を求めようとしなないことも、幼稚さのあらわれである。もっとも鷲田清一は、《では、いまの大人が「自活」しているかといえば、これも心許ない。》と憂えて、「『自活』は、仕事の意味によってではなく、給料をとっているという経済的事実でしか確認しようがない」ところで、若者は《学校という、はてしなく続く大人になるための時間へと延長され、じぶんが大人か子どもがよく分からない時間が延々と続く》なかにあるように、《大人もまた企業という学校のなかに居続け》ており、日本の社会が《いつまでも大人になることを不可能にしている社会》構造にあることを指摘している。

この社会全体の幼稚さが、ネット心中を貫いていない筈はないと考えられる。山梨大教授の池田清彦は『朝日新聞』(03・4・21)のエッセーで、《赤の他人と心中をする》という特異さにこだわって、その理由を次のように探る。《ネットでつい最近知り合った自殺願望を共有する赤の他人は、実は最も心を許せる身内なのではないか、との仮説を立ててみる。ノネット上で自殺願望を表明する若者は、親、兄弟、友達、先生、といった本来ならば自分の最も良き理解者のはずの人々に、全く心を通わすことができないのだと思う。彼らの心の中では、これらの人々は赤の他人なのだ。赤の他人に、自分の本当の気持ちをお話さないのは当然なのである。彼らには、ネット上の匿名の他者こそが身内なのだ。》

なぜ、そうなるのか。《肥大した未熟な自我を個性と勘違いして》育った若者は、《個性も人生の楽しみも平凡な生活の中にしかありはしない》ことに気づかずに、《ネット心中で重体になった大学生は、自殺の理由について「あと40年間、毎日同じ生活をす

るのは苦しい」と言った》ように、《この大学生は、誰も本当の私を理解してくれない、と思っていたに違いない。肥大した未熟な自我を本当の私というのであれば、そんなものは理解されなくて当然なのだ。

本当の私を理解してくれる（と錯覚できる）のはネット上の匿名の他者だけなのだ。なぜならば、そこでは気に入った言説だけを選び、気に入らないものは見ないで済ますことができるから。かくして、赤の他人と身内の逆転が起きる。ネット心中願望者は自分と同じ者をネットで見つけ、一緒に自殺できることに安らぎを覚えているようにみえる。

「独りで死ぬのは寂しい」との彼らの異口同音のコトバは、自殺以外に自己実現の道を見いだすことができなかつた、肥大した未熟な自我の最後のかなしい叫びである。》

書き手は、《もういい加減に個性重視の教育などやめたらどうかね。教育とは、人並みに生きるための技術を教えることなのだ。》と締め括る。ネット心中を《肥大した未熟な自我の最後のかなしい叫び》とみることには首肯するけれども、書き手のいう《心中というのは、個人的事情を同じくする人々（夫婦とか家族とか）が、精神的に追いつめられてするものだ、というのが私を含めた世間の常識》からは計り知れない「寂しさ」に包み込まれている若者の場所に届くには、まだなにかが足りない気がする。たぶん若者は《本当の私を理解してくれる（と錯覚できる）のはネット上の匿名の他者だけなのだ。》とは思っていない。《本当の私を理解してくれる》者など、この世のどこにもいないと思っっているようにみえる。そのことの「寂しさ」が自殺へとたえず誘^{いざな}うが、同時に誰かとつながっていないという気持も抑え切れない。この相反する気持を一挙に叶えるのが、ネット心中なのだ。

「独りで死ぬのは寂しい」という呟きの裏には、独りで生きるのは寂しいという思いが充満している筈である。つまり、独りで生きるのは寂しいから死のうと思つたにちがいない。しかしながら、独りで生きる寂しさに耐えられなくて死ぬのに、独りで死ぬ寂しさにはどうしても耐えられない。独りで生きる寂しさに耐えられないなら、一緒に生きる者を見つけて生きていけばいいではないかということになるが、一緒に生きる者を自分の周囲に見つけることはできないのだ。まだ若いのだから、そのうち《本当の私を理解してくれる》相手が現れるのを待つこともできる。しかし、「本当の私」などはそもそもどこにもいないフィクションにほかならないから、いくら待っても《本当の私を理解してくれる》相手が現れる筈はない。それでも現れることを信じて待つことはできる。待っている間じゅう、何も起こらなければよいが、自分を中心に世界は回っているわけではないから、失職したり、交通事故に見舞われたり、借金する羽目に陥ったりすることが起こりうる。そのとき、独りで生きてきた寂しさに外からの重圧が加わって一層寂しさが募り、こんな時こそ現れてほしい《本当の私を理解してくれる》相手がいないことの寂しさも相乗されて、独りで生きる寂しさは一気に自殺へと傾く。

従来であれば、そこに単なる自殺が見出されるだけであつた。独りで生きる寂しさは、

独りで死ぬ寂しさとして帰結する以外になかった。独りで生きる寂しさに耐えられない者は独りで死ぬ寂しさを味わうほかに術はなかった。自殺を伝え合うツールがなければ、一家心中や情死以外の赤の他人との心中など成就する筈もなかった。ところが、ネット時代が到来したのである。独りで死ぬ寂しさを回避する術として、「一緒に死にませんか」と呼びかけ合うこともできるようになったのだ。よく考えれば、ネット上でさまざまな情報が飛び交っているのであれば、そこに自殺の方法が詳しく書き込まれたり、一緒に死ぬ人の募集が入り込んでくるとしても、何の不思議もなかった。そう考えると、《本当の私を理解してくれる（と錯覚できる）のはネット上の匿名の他者だけなのだ。》という指摘とはかかわりなく、ただ単に自分と同じように自殺しようとしている者をネット上で見つけて、連絡を取り合っ一緒に死んでいっただけのようにもみえる。

三重県津市でのネット心中では、三年越しの恋人との関係が続いていたにもかかわらず、自分の借金問題を苦にして赤の他人との心中に加わった女性の事例が見出されたが、彼女はおそらく自分の借金について恋人に打ち明けることはなかった。自分の悩み事を打ち明け、相談に乗ってもらう相手こそが恋人であると思われるのに、彼女はそうしなかった。恋人に打ち明けなかったのは、恋人を自分の借金問題に巻き込みたくなかったからだと思われる。巻き込みたくなかったのは、恋人に対する一種の配慮かもしれないし、あるいは恋人が自分から離れていく懸念があったからかもしれない。いずれであれ、彼女は恋人に別れを告げて、赤の他人との自殺に加わることになったが、彼女の大人になりきれない幼稚さはネット心中そのものよりも、それへの参加の有り様にくっきりと浮き彫りにされている。

彼女は自分の悩みを恋人に打ち明けないまま、一方的に恋人から去り、赤の他人とのネット心中に加わることが恋人にどれほどの衝撃をもたらすことになるか、を考えてみもしなかったのである。恋人が通常の神経を持ち合わせている男性なら、二度と起ち上がれないほどのショックに見舞われるかもしれないと想像するなら、恋人に打ち明けないということが彼への配慮である筈がなかった。また、打ち明けると恋人が彼女の許から去って行くかもしれないという懸念は、彼女が打ち明けずに恋人の許から一方的に去って行くことを考えれば、どうにも理不尽であったし、だいいち、打ち明けると恋人が彼女の許を去って行くことになるかどうかは打ち明けてみないことにははっきりしなかった。打ち明けて恋人が去って行くなら、彼女も晴れてネット心中に参加できた筈である。

彼女のことを記事にしている『週刊新潮』（03・3・20）の文面からは、彼女が恋人に打ち明けた様子もなく、最後のデートで明るく書き遣した手紙を恋人に手渡したことになるが、もしかすると彼女は最後のデートで自分の悩みを打ち明け、恋人の反応を確かめた上での行動だったのかもしれない。恋人が頼りにならないことを見定めた上でのネット心中への参加だったとしても、その直線的な行動には、鷲田清一が時評コラム（『中央公論』02・6）でいうところの《コミュニケーションの場の閉鎖》

がみられる。《ファクシミリ、携帯電話、インターネット、iモード……とコミュニケーションの媒体が進化すればするほど、じつはコミュニケーションではなくディスコミュニケーションがこの社会を象徴する現象になってきている。そのひとつに、コミュニケーション圏の縮小という現象がある。コミュニケーションの媒体が進化することで逆に世界が縮小してゆくという、なんとも皮肉な現象である。》

この鷲田清一の指摘から思い浮かぶのは、赤の他人とのネット心中は《親、兄弟、友達、先生、といった本来ならば自分の最も良き理解者のはずの人々に、全く心を通わすことができない》くなっているコミュニケーション不全の事態から押し寄せているという先の池田清彦の指摘である。その身内には今や恋人まで含まれる。だからといって、彼がいうように、赤の他人である《ネット上の匿名の他者こそが身内》であるというわけでもない。ファクシミリ、携帯電話、インターネット、iモードなどのコミュニケーション媒体が、「誰かとつながっていたい」という欲求の合図にしかすぎず、むしろそこに大きく露出しているのがディスコミュニケーションであるなら、ネット心中こそは一緒に死んでゆくというコミュニケーションの断絶の極限を指し示しているように思われる。

「夢を持って」「願えば夢は必ずかなう」と力説することが、現実社会のあまりもの希望のなさを浮き彫りにしているように、携帯、ネット等のコミュニケーション媒体の進化がコミュニケーションの断絶の深化を露出しているとすれば、赤の他人とのネット心中というよりも、赤の他人だからこそそのネット心中は今後も若者ばかりではなく、ネットの活用次第によっては中高年や老年にまで拡大しても別におかしくはないと感じられる。独りで死ぬ寂しさはためらいを生みだすけれども、相手さえ見つければ弾みを増すからだ。精神科医の斎藤環は『中央公論』の時評(03・4)で、《いまや意志の内容や価値に関わりなく、若者はみずからの動機付けのためにネットを使用しつつある》現況に注目して、《ネットワークの網の目は、「行動」にまで熟していかない若者たちの不安定な意志や葛藤のつづやきを横断的にすくいあげ、濾しとり、あるいは蒸留し、ついには行動にまで煮詰めてしまうこともあるのではないか。》という。

《よくこうした若い世代に対して「ゲーム感覚」「生死のリアリティへの感受性がない」「死んでもリセットすれば生き返ると思っている」「現実と虚構の区別がつかない」などといった「解説」がなされるが、これは誤解もはなはだしい。もしも彼らが本当に死のリアリティに鈍感なら、どんどん勝手に一人で死ぬだろう。しかし実際には、死にたい思いを抱えながら死ねずにいる若者が数十万人規模で存在するのが現実だ。だからこそ彼らは、他者によって自殺の動機付けを固めてもらおうとするのではないか。》

《死にたい思いを抱えながら死ねずにいる若者》の《それぞれの弱く煮え切らない動機が加算によって増幅され、ついには実際の行動へと彼らを押しやり、《彼らはまるで匿名のまま出会い、匿名のままに死んでいったようにもみえる。いったいそこに、なんらかの「出会い」はあったのだろうか。》と問うが、匿名のままの出会いには匿名のまま

に閉じられ、そこからはどんな物語も生みだされない以上、「出会い」もまた閉ざされている。お互いに匿名のまま死んでゆくことは、赤の他人同士として死んでゆくことであり、池田清彦がいうような、《彼らには、ネット上の匿名の他者こそが身内なのだ。》ということも起こりえなくなっている。

さて、ネット心中についてさまざまな考えに接しながら追求してきたが、最後に全く異なる方向からの見方を取り上げておく。月に400万人が訪れるという巨大サイト「2ちゃんねる」の創設者で管理人の西村博之(27)は、ネット自殺を訊かれて『朝日新聞』(03・5・2)でこう答えている。「いまの日本は、命を軽く見る方向に動いていますよね。例えば日本政府はアメリカのイラク爆撃を支持した。あれって、『イラク人は殺してもいい』と言っているようなもの。それを国家が支持している。国家はなんのために戦争をやるかということ、最終的には自国の利益のためにやっている。命の大切さを教えないほうが、国家としての政策はうまくいく。そんな国益が前面に出て、個人は背景に消えようとしている。『ネット自殺』よりも、こうした現実のほうがずっと大きな問題だと感じています」

ここから、アメリカが「イラク人は殺してもいい」ということを日本国家が支持すること、日本国内で《死にたい思いを抱えながら死ねずにいる若者》がネット心中によって《自殺の動機付けを固めてもらおうとする》こととは同じではないか、という声が響いてくる。つまり、生きる意欲を一向に感じさせない国家の動きは、外ではアメリカのイラク爆撃の支持に向かい、内ではネット心中の放置に向かわざるをえないということだ。もう一つ、若者のネット心中が横行する現代社会は《産業資本主義からポスト産業資本主義への転換》期であり、《カネよりヒトが主役》の時代が漸く到来しつつあるという主張(『朝日新聞』03・5・6)が、経済学者の岩井克人によって次のようになされている。

産業資本主義の時代は農村の余剰人口から大量の安い労働力を得て、機械を備えた工場労働者を働かせる大量生産の時代であった。おカネを持つ者が工場を建設しさえすれば、ほぼ確実に利潤を生みだすことができたが、20世紀後半の先進資本主義国ではもはや農村から過剰な人口が消えて賃金が上昇し始め、工場を建設するだけでは利潤が確保できなくなった。利潤は差異性からしか生まれず、《企業は横並びをやめ、新製品の開発や新技術の発明や新市場の開拓などによって、意識的に差異性を創らなければ生きていけなくな》るポスト産業資本主義へと移行せざるをえなくなったのである。

《言うまでもなく、差異性を創り出せるのは、モノ(機械)ではなく、ヒトです。新製品を開発し新技術を発明し新市場を開拓するのは、経営者であり技術者であり従業員です。そして、ヒトはモノと違って、おカネで買うことはできません。労働時間は拘束できても、ヒトに自由意思がある限り、ヒトの頭の中の知識や能力を外部から完全に支配することは不可能です。すなわち、ポスト産業資本主義の時代とは、まさにおカネがヒトにその支配権を譲り渡しはじめている時代なのです。

株主とは、会社におけるおカネの最終的な供給者です。その株主に会社の支配権を独占させるアメリカ型の株主権論とは、おカネで買えるモノが最大の資産であった産業資本主義を前提とした論理でしかなかったのです。

(中略)日本経済は、21世紀に入った今も、低迷状態から脱却できていません。それは、バブルの崩壊とその後の経済政策の失敗という短期的な要因によるだけではありません。その底流には、これまでの日本的な経営が、産業資本主義からポスト産業資本主義への転換に対応し切れていないという、もっと根源的な要因が働いているはずです。

しかしながら、そのポスト産業資本主義時代の会社を支配するのはおカネではなくヒトであるという事実は、少なくとも一つの救いを日本にもたらしてくれます。株主よりも従業員の利害を重視してきたといういわゆる日本的経営 - それが、21世紀における会社のあり方とさほど遠くないところにあることを教えてくれるのです。》

この明快な論旨を若者のネット心中に至る背景と絡ませて、理解することができる。産業資本主義の時代に入って、多くの人々が安価な労働力として工場に大量雇用されることによって農村から切り離され、都市化が促進されていくことになったが、農村の自然から人工の都市への移行は当然ながら、人々に故郷喪失の「寂しさ」を味わわせずにおかなかった。だが更に、利潤を生み出す安価な労働力としてのみ評価され、能力が切り取られていく個々の人間としての「寂しさ」もそこに付け加わってくる。一定の生活水準が確保されながらも働くことの喜びが下位に置かれていることの「寂しさ」は産業資本主義時代では、個人、家族、会社等を貫く基調の精神として人々は耐えねばならなかった。「給料日」が唯一^{ペイデイ}些細な幸福であるということは、給料日以外の日々に人々は単調な労働者としていかに「寂しさ」を堪え忍んでいるかの裏返しであった。もちろん、その「給料日」すらも手に出来なくなる雇用不安の「寂しさ」にも、人々は不況の中でいつも直面していなければならなかった。

しかしながら、おカネが主役となって大量に画一的な商品を産出する産業資本主義では、商品の差異化にしか人々が購買意欲を持ちえなくなった、成熟した消費社会に対応できなくなってしまったのである。商品の差異化を創出するのはおカネではなく、ヒトであるから、ポスト産業資本主義時代に入って漸く会社の中でヒトこそが活躍しなければやっていけなくなったということなのだ。会社に勤めることの「寂しさ」はヒトよりカネが主役であったことに大きく起因しているから、そこではヒトとしての「寂しさ」を克服する機会を人々は手にすることになったといえる。もちろん、その克服は人間としての「寂しさ」を克服する途へと連なっており、《死にたい思いを抱えながら死ねずにいる》状態に生きてくたたらなくなる遠くからのかすかな明かりがやっと差し込みつつある(かもしれない)気配を感じ取らなければ、ネット心中から聞こえてくる《肥大した未熟な自我の最後のかなしい叫び》はいつまでも絶えることはない。

2003年6月8日記